

3. 物理環境と生物環境の横断的とりまとめ（エリア別・事業段階別）

荒瀬ダムは、ゲート開放、水位低下設備の運用、みお筋部の撤去の大きく3つの事業段階を経て撤去された。この事業段階別の環境変化について、環境モニタリング調査結果をもとに物理環境と生物環境に着目し、表 3.1.1 及び図 3.1.1 に示す流水区間、湛水区間、減水区間等の環境変化が想定されるエリア別に分類して、物理環境と生物環境の変化を横断的にとりまとめた。

表 3.1.1 瀬戸石ダム下流から遙拝堰までのエリア区分

区分	距離標	内容等
遙拝堰湛水区間	9k000～12k400	流水環境に大きな変化はない
下流流水区間	12k400～18k000	流水環境に大きな変化はない
減水区間 (流水回復区間)	18k000～19k910	「i ゲート開放」により流水環境に変化
荒瀬ダム湛水区間 (第2流水回復区間)	19k910～22k910	「ii 水位低下設備の運用」により流水環境に変化
荒瀬ダム湛水区間 (第1流水回復区間)	22k910～26k910	「i ゲート開放」により流水環境に変化
上流流水区間	26k910～28k800	流水環境に大きな変化はない
百済木川湛水区間 (百済木川流水回復区間)	0k000～1k300	「i ゲート開放」により概ね流水環境に変化
百済木川流水区間	—	流水環境に大きな変化はない

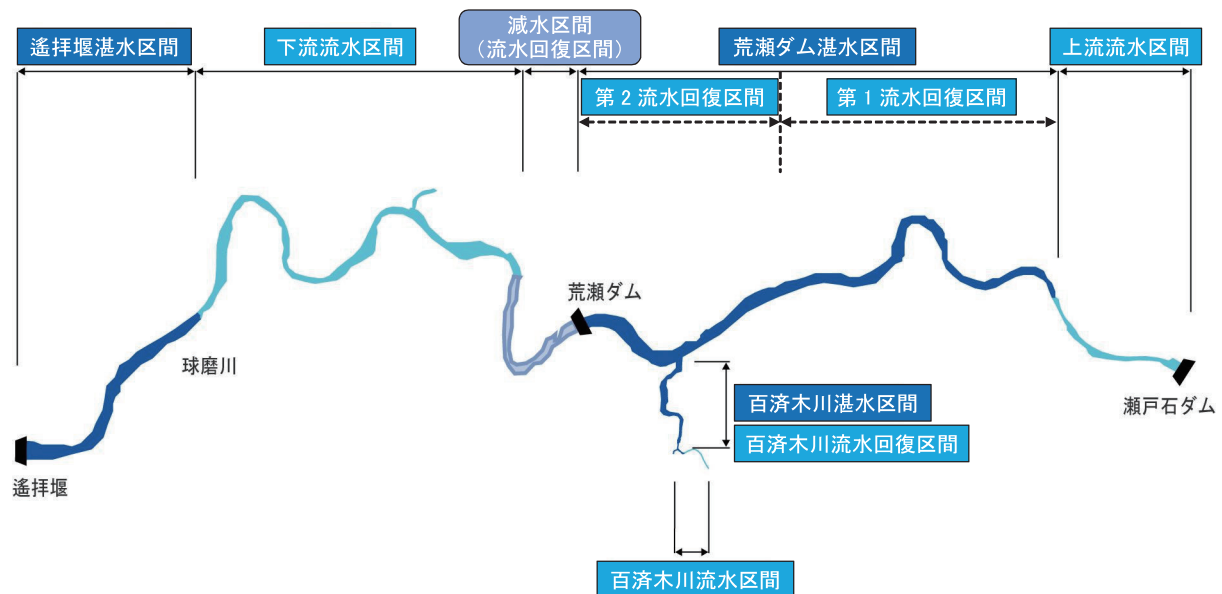


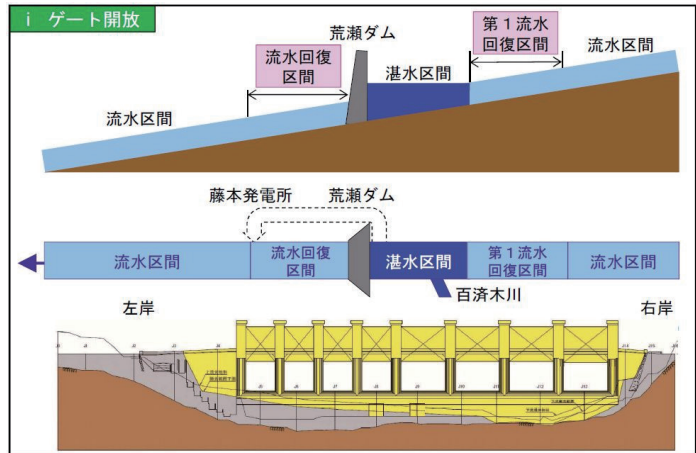
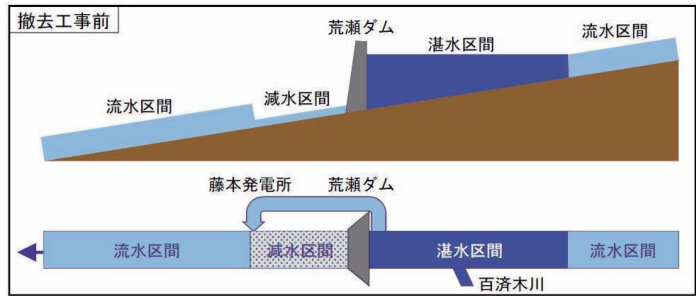
図 3.1.1 瀬戸石ダム下流から遙拝堰までのエリア分類

3.1 荒瀬ダム撤去の事業段階ごとに想定された環境変化

ゲート開放、水位低下設備の運用、みお筋部の撤去の各事業段階において想定された環境変化を以下に示す。

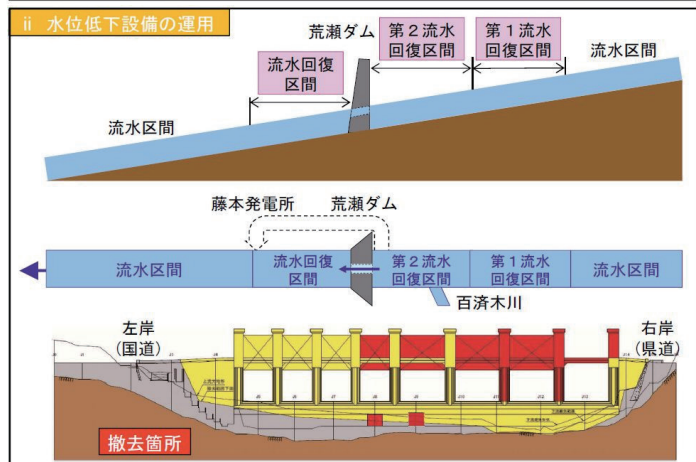
i ゲート開放 (H22. 4~H25. 6)

- ダム上流の湛水区間は、撤去工事前より水位が低下し、ダム流入付近及び流入支川の百済木川上流が流水環境（第1流水回復区間・百済木川流水回復区間）へ変化すると想定された。
- ダム下流の減水区間は、発電取水の中止により水位及び流量が増加し、流水環境（流水回復区間）へ変化すると想定された。



ii 水位低下設備の運用 (H25. 6~H27. 3)

- ダム上流は、更に水位が低下し、区間全体が流水環境（第2流水回復区間）へ変化するとともに、流速が増加して河床の細粒土砂が流出しやすくなると想定された。
- ダム下流は、上流からの細粒土砂が堆積すると想定された。



iii みお筋部の撤去 (H27. 3~H31. 3)

- ダム上流は、流水区間に変化し、流入支川の百済木川も含めて、上流からの供給土砂及び河床の堆積土砂が自然流下すると想定された。
- ダム下流は、上流からの土砂が堆積すると想定された。

